

旧岡崎邸能舞台（小樽市能舞台、大正15年）の近代和風建築としての意義

北海道職業能力開発大学校 駒木 定正

The Significance of the Old Noh Stage of Okazaki House (The Otaru City Noh Stage, 1926)
in the History of the Modern Japanese Style Architecture

Sadamasa KOMAKI

要約 旧岡崎邸能舞台（現小樽市能舞台、小樽市花園5丁目）は、大正15年、小樽の商人岡崎謙（明治10年4月～昭和29年3月）によって自邸（小樽市入船）の中庭に見所とともに創建された。謙の没後、舞台は岡崎家から小樽市へ寄贈され、昭和36年に旧小樽区公会堂（明治44年）の移築と合わせて現在地の小樽公園内に再建された。

本稿は、旧岡崎邸能舞台の沿革と実測調査にもとづいて各部の建築的特徴について述べるものである。とくに、旧岡崎邸能舞台の実測調査資料と江戸幕府大棟梁の平内家の木割書である『匠明』中の「舞台」の記述を比較し、同能舞台が伝統の建築に倣って建てられていることを明らかにし、近代和風建築としての意義を考察する。

実測調査は、北海道職業能力開発大学校建築科の学生とともに総合制作実習の一環として1999年度と2000年度の2箇年にわたって実施し、さらに、実測データをもとに模型（1/30）の制作とそれらを卒業研究論文としてまとめるための指導にあたった。

緒言

旧岡崎邸能舞台（現小樽市能舞台、図1）は、大正15年、小樽の商人岡崎謙（明治10年4月～昭和29年3月）によって自邸（小樽市入船）の中庭に創建されたものである（図2～5）。謙の没後、岡崎家から小樽市へ寄贈され、昭和36年に旧小樽区公会堂⁽¹⁾の移築と合わせて現在地の小樽公園内（小樽市花園5丁目）に再建され、現在に至っている。

本稿は、旧岡崎邸能舞台にかかわる沿革と実測調査にもとづいた建築の各部の特徴を述べ、さらに江戸幕府大棟梁の平内家の木割書である『匠明』⁽²⁾の記述と比較し、近代和風建築としての旧岡崎邸能舞台の歴史的価値を考察する。

本建物の実測調査は、1999年度と2000年度の2箇年にわたって北海道職業能力開発大学校建築科の総合制作実習の一環として実施したものであり、当該学生は

実測データをもとに現況図面の作成および模型制作をとおして調査結果をまとめ、その成果を校内卒業研究発表会、ポリテクビジョン^(注1)および「能に親しむ会」^(注2)などにおいて発表報告した。

なお、旧岡崎邸能舞台は全国的にみても大正期の希少な能舞台の遺構であり、小樽市は景観条例によって



図1 旧岡崎邸能舞台（現小樽市能舞台、小樽市花園5丁目）

旧小樽区公会堂とともに指定歴史的建造物に定め^(注3)、保存活用している。実測調査にもとづいた建築の特徴についての考察は本研究がはじめてであり、歴史的建造物としての重要性を各部の構造について検討できたと考えられる。

建築の沿革

1 岡崎謙

岡崎謙は、明治10年4月5日、新潟県佐渡郡西三川村（現羽茂町小泊）で生まれ、明治21年に小樽で商売を営む父（藤太郎）のもとに移住し、同23年には上京して東京英和学校（現青山学院大学）、東京高等商業学校（現一橋大学）で学ぶ。明治32年、父が死去したため小樽で家業の荒物卸・倉庫業を継ぐとともに、小樽区会議員、市議会議長（大正11年市制施行）などを歴任、また大正7年には学資に恵まれない児童・生徒のために育英事業を興すなど公私にわたって活躍した。

さて、岡崎謙は上京中に宝生流の波吉門下において能を習い、帰郷後、本格的な能舞台を建築するほど能に傾注した。同邸能舞台には中央から多くの賓客を迎え、昭和3年に徳川喜久子（後の高松宮妃）、同6年に貴族院議長の徳川家達、同9年に宝生重英（宝生流

17世宗家）らが来訪している。

普請にも関心が高く、自邸の建築に際して敷地が傾斜地であったことから石垣を二重に積み上げる工夫をしたという。

2 能舞台の創建

大正14年7月、岡崎謙は自邸の新築とともに能舞台の建築に着手する。この建築を請負ったのは大工職小杉米蔵（明治元年～昭和8年、当時小樽市在住）であり、岡崎と同郷の佐渡出身であった。岡崎邸の工事には桑原某と土田某および子息の勝治らを伴い、また妻も岡崎家に女中頭として仕えた^(注4)。

能舞台の建築に先立ち、岡崎と小杉は靖国神社能舞台（旧芝能楽堂）を調査し^(注5)、入母屋、二軒などの形態を模して建築した。旧芝能楽堂は、岩倉具視を中心とする能楽社が明治14年に東京市芝山内紅葉谷に舞台、楽屋、見所を一つの建物に構成した能楽堂であり、近代能舞台の嚆矢に位置づけられる。明治35年には同会より靖国神社へ奉納された。

さて、岡崎邸能舞台の建築材料は、大正13年に佐渡（岡崎家所蔵写真帳の記述には「佐渡国羽茂村大字大崎字角満沢」）から掘出した神代杉や九州からの檜が調達されている。

大正14年12月には能舞台をはじめ楽屋、脇正面見所、事務室などが完成し、翌15年に正面見所が竣工し、1月26日に舞台開きが催された。この竣工によって居宅が正面左手（北西側）それに接続させて能舞台と見所が右手（南東側）に配される形態が整い、舞台からは見所を通して海を遠望する演出も生み出された。

建築費は、岡崎家所蔵の文書⁽³⁾によれば、能舞台・楽屋・脇見所など（80坪）17,935円12銭、正面見所（49.5坪）5,562円、居宅部分（105.5坪）24,258円、このほか設備・外構に4,432円20銭、倉庫7,008円17銭であり、合計が59,196円25銭であった。

竣工後の昭和2年には狩野17代秉信を招いて正面鏡板の松、袖面鏡板の竹および揚幕部板戸の唐獅子が描



図2 岡崎邸能舞台（岡崎家所蔵）



図3 「能楽堂落成祝賀」
（大正15年8月1日、岡崎家所蔵）



図4 岡崎邸見所と能舞台
（岡崎家所蔵）



図5 岡崎邸内観（岡崎家所蔵）

かれ、11月12日に揮毫記念能、翌13日に波吉先生退道記念能が開催された。

3 能舞台の移築と現況

昭和29年6月10日、岡崎家は謙の逝去にともない小樽市へ能舞台の寄贈を申し出、7年後の昭和36年8月6日から18日に舞台が解体され、同年、小樽公園の現在地に再建された。

再建工事は佐渡から呼び寄せた大工が担当し、創建に携わった小杉勝治らは関わらなかった。移築事業は小樽市がおこない、市民会館を旧小樽区公会堂の位置に新築し、公会堂を曳家によって移築するとともに旧岡崎邸能舞台の移設と一体化させたのである。その配置計画は、旧小樽区公会堂の本館棟と御殿棟を鉤の手状に並べ、その内庭側に旧岡崎邸能舞台を配し、橋掛を御殿棟と接続させた。

移築の本館と御殿の地階を見所に見立てる計画としたが、室内の洋風意匠、座席の位置と高さや中庭の構成は舞台と一体化されず、20年以上も能を鑑賞する機会がもたれなかった。

昭和48年1月には、札幌の北海道神宮境内に移築する計画もあり、同神宮所蔵文書⁴)によれば、当時の舞台の状況は「小樽市が管理しているが見所が無いので各派能楽家は適当な所え（ママ）との希望」、「小樽市では活用する方法が無い、さればとて宝生とか観世とかの一部の人の所有には賛成出来ない 費用は道で解体兼組み立て等は調達すると云う事であるが場所を決定してから具体的の対策を立てたい」と記す。

近年、旧岡崎邸能舞台の価値が広く再認識されるようになり、昭和60年に小樽市歴史的建造物の指定、翌年8月には小樽市民によって「能に親しむ会」の設立、さらに年に数回の一般公開がもたれ、保存と活用の啓蒙活動が展開されている。



図6 旧岡崎邸能舞台内観

現能舞台の実測調査による建築の特徴

1 建物の構成と概要

現能舞台の移築建物の構成は舞台と橋掛からなる（図7）。舞台の建築概要は、入母屋造、垂鉛渡鉄板葺、規模が3間四方（約5.460m）で正面右手に脇座（地謡座）と奥に後座を設け、脇座に脇障子を付け、舞台と橋掛は約78度の角度で接する。また、舞台の外周にはガラスを嵌めた囲いを廻らし、建物を保護している。橋掛の概要は、切妻造、垂鉛渡鉄板葺、規模が桁行柱間3間、梁間柱間1間である。

棟札は、小屋裏調査の際に探したが据えられていなかった。創建時から無かったのか、移築の際に取り除かれたかについては不明であるが、上棟式をおこなったと伝えられる^(注6)ことから当初は据えられていたことが窺われる。

2 各部の構造（図8～13）

2.1 基礎回り

現能舞台が建つ敷地は傾斜地であるため、石垣を築き、土盛りを施している。土間はコンクリートで打ち、建物の外側に玉砂利を敷き、基礎は舞台と橋掛の周囲を布基礎とする。

舞台の基礎回りは、柱と地覆長押をボルトで締結し、正面と両側面を豎羽目、後座背面を下見板とする。ボルトの周囲には六葉金物の痕跡があり、地覆長押の隅にも金物の痕跡が認められる。脇座の基礎回りは、礎石に縁束を1間間隔で立てる。舞台の改修箇所は、大引を支えるために両側面に束を立て、また、笛柱を大引の接合部下端で切断し受板を突付で挟み束によって支持している。

橋掛の基礎回りは、柱を地覆で接続し、正面を豎羽目、背面を下見板とする。

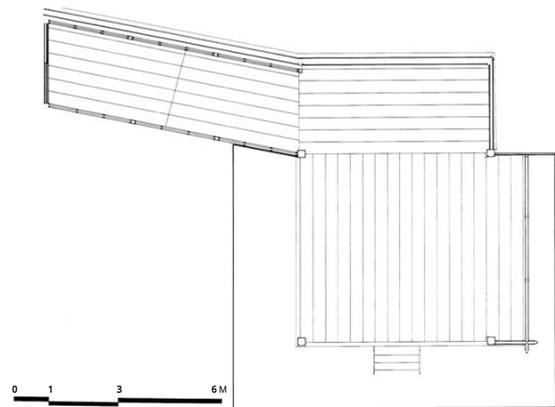


図7 旧岡崎邸能舞台平面図（製図：部田亜紀）

2 2 軸部

舞台の軸部は、柱、腰長押、頭貫と組物上端に架け渡す虹梁・桁で構成される。柱は角柱（7寸5分角）で几帳面を施し頭貫を渡す。また、組物上の虹梁には眉欠きと若葉の彫刻が施されている。

橋掛の柱は角柱（3寸6分角）であり、その配置は正面と背面とも柱間3間とし梁を舞台の桁行と平行に配することから、橋掛の梁と桁のなす角度は舞台と橋掛との斜角（約78度）になっている。

2 3 柱間装置

舞台の柱上の組物は出三斗として虹梁・桁を支え、頭貫と虹梁の間には4方向とも暮股が2箇所ずつ配される。暮股は一木からなり、中央を割り抜いた左右対称形で上部に斗と肘木を組んでいる。後座には鏡板、脇鏡板、切戸口を設け、神代杉の鏡板に松、脇鏡板に竹が描かれる。

切戸口は舞台の外と接続がなく、現在、塞がれて使用できない状態である。脇座には脇障子を設け、上部を竹の節欄間とするが、軒下から下端まで後補の板で塞がれ、笠木と柱の間も同様に後補の板が張られる。

橋掛の背面は神代杉の縦板が張られ、揚幕部分には引違いの杉板戸が入り、板戸に唐獅子が描かれる。

2 4 床組

舞台と橋掛の床組は、根太を用いず大引に直接床板が張られる。

舞台の大引（約210mm×120mm、8本）は猿頬面を施した通し材であり、床板は幅355mm前後、厚さ約27mmである。奥座の大引（120mm×60mm）は600mm間隔で入り、床板は舞台と直交する。

橋掛の大引は猿頬面を施し、床板は桁行方向に張り、ほぼ中央で継ぎ合わされる。

一般に能舞台の床下に瓶を置いて音響効果を高めることが知られるが、現在、本能舞台には瓶は設置されていない。

2 5 天井

本能舞台の天井の勾配は、舞台と後座および橋掛とも20度で同じである。

舞台と後座は化粧垂木天井である。舞台では虹梁の中央に束を立てて化粧棟木を支持し、束には笈形の彫刻が付けられている。化粧垂木（80mm×60mm）は軒裏では地垂木となって伸び、間隔が360mmである。小舞は210mm間隔で入り、野地板が張られる。また、後座の天井は背面方向へ片流れになり化粧垂木は舞台と同寸である。

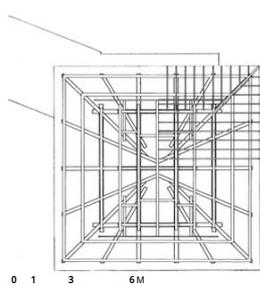


図8 旧岡崎邸能舞台小屋伏図（製図：藤井徹真、軒部分一部未調査）



図9 旧岡崎邸能舞台目付柱の柱頭と軒裏



図10 旧岡崎邸能舞台小屋組



図11 同能舞台小屋組

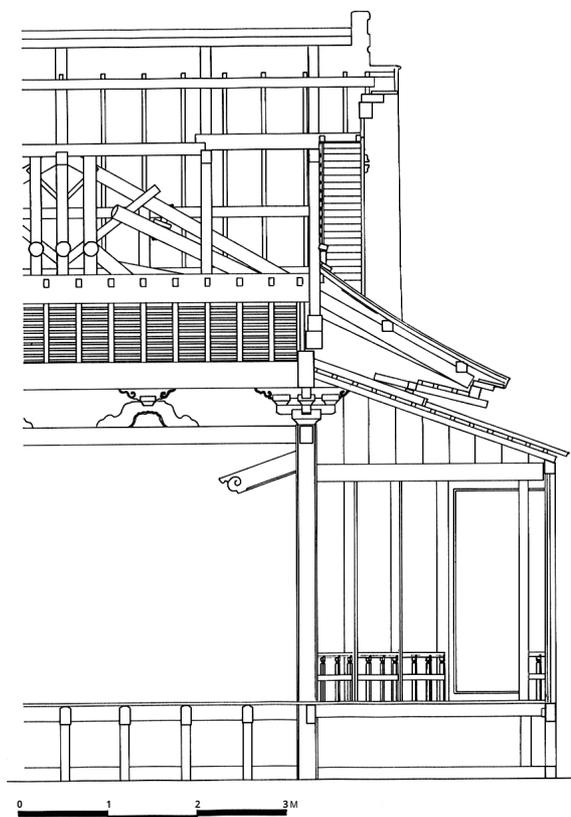


図12 旧岡崎邸能舞台桁行断面詳細図（製図：藤井徹真）

橋掛の天井は化粧屋根裏である。垂木（60mm×54mm）は20度の勾配で舞台の桁方向に対して平行に配され、小舞は橋掛の桁方向に平行であり、その交差する角度は舞台と橋掛との斜角となり、本橋掛天井の特色といえる。橋掛の舞台側破風には眉および破風尻に渦の彫刻が施されている。

2.6 小屋組

舞台の小屋組の特徴は、化粧垂木に束を立て、桔木を扇状に12本配した点にあり、桔木の配置は積雪荷重などの分散化を考慮したと推察される。

化粧棟木の中央には3本の束を約1尺間隔に立て、束には両方向から桔木が柄差で接続する。中央の束には梁間方向に送り梁を架け、さらに地棟を直交させて棟束を立てる。また、梁間方向の桔木に各3丁の母屋束を立て、棟を境とする内側の母屋束通りは小屋筋違で連結している。柱通りには丸桁をめぐらし桔木を支持するが、梁間の丸桁は柱心よりもやや外側に配し、土居桁を重ねる。丸桁を柱心の外にをはずしたのは、虹梁の上に化粧棟木を支える束を立てたためと推察される。

鉄棒（φ20mm）によって小屋内側では繫梁と桔木、軒では桔木と飛檐垂木および地垂木を締結している。また、短冊鉄物によって束と小屋筋違を締結する。

後座と橋掛の小屋組は、前述のとおり化粧屋根裏である。後座の垂木は直接虹梁の背面に柄差され、橋掛

は4本の梁が架けられ棟束によって棟木を支える。

2.7 屋根

舞台の屋根は照りのある入母屋で後座に下屋が付き、共に垂鉛鍍鉄板葺である。現在、棟に鬼瓦を据え、破風板の下端には拝み懸魚を設けて六葉に菊座と樽の口を付ける。妻壁には木連格子が納まり、背面の格子は改め口にもなっている。垂木は二軒で疎垂木である。

なお、創建時には棟板が据えられていたが風化のために取り換えられ、現在小樽市公会堂に保存されている。背面の懸魚の一部と樽の口の欠損はあるが、全体は旧態を保っている。橋掛の屋根は、切妻、垂鉛鍍鉄板葺である。

『匠明』による「舞台」との比較

『匠明』は慶長13年（1608年）平内政信によって執筆された木割書であり、この中の「舞台」⁽⁵⁾（能舞台）の記述をもとに旧岡崎邸能舞台（小樽市能舞台）と比較し、江戸期の中央の舞台との関連を推察する。

以下に述べる項目を概括すれば、旧岡崎邸能舞台は『匠明』の記述と一致する部分が認められる本格的な舞台であり、舞台の広さは「三間四方」、柱の太さは柱間の4/100、組物は三斗組、橋掛は柱間3間である

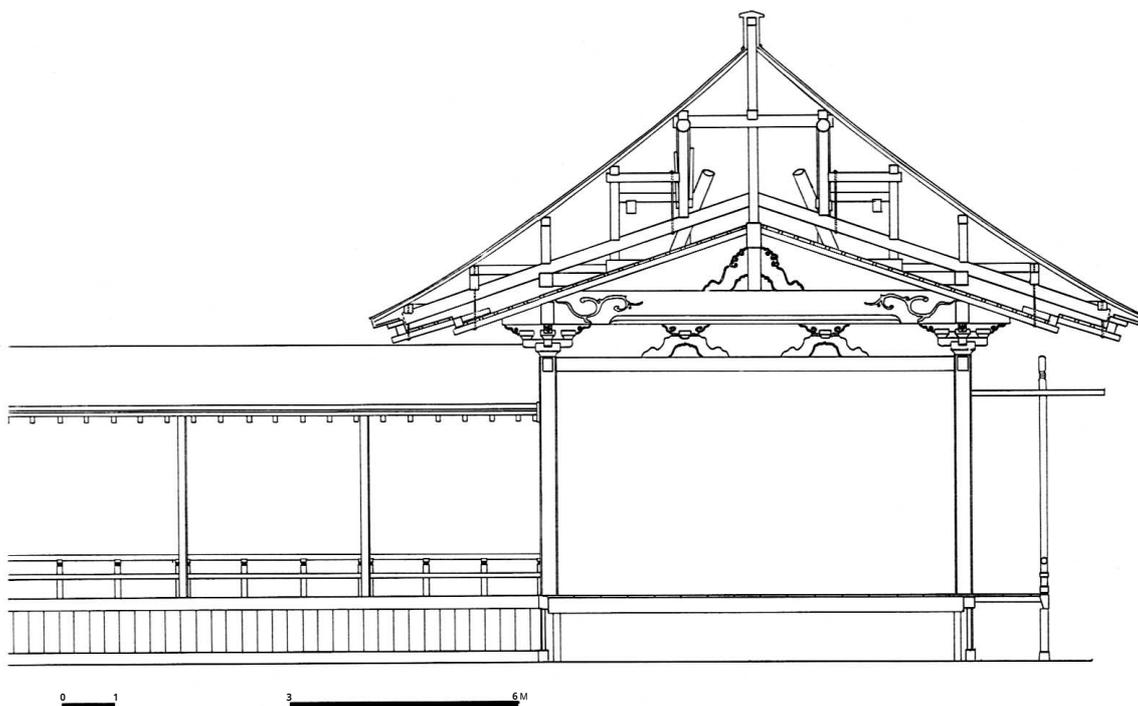


図13 旧岡崎邸能舞台梁間断面図（製図：藤井徹真）

のはその合致点である。

1 舞台の規模

舞台と後座の広さを『匠明』は次のように記す。

一、間八三間四方ニして、後座九尺ニすへし

旧岡崎邸能舞台は「三間四方」の記述どおり正方形の平面であり、実測による柱間寸法(5 460mm)から1間を1 820mmとしている。また、後座の奥行は2 558mm(8 4尺)であり、『匠明』の記述よりも6寸狭くなっている。

2 舞台の柱の太さ

舞台の柱の太さは、『匠明』によれば、柱間の4/100としている。

一、柱ノ太サ惣間にて4分算ニすへし

実測にもとづく柱の平均太さは227mmであり、柱間寸法(5 460mm)の4分に相当する218mmと比較すれば、9mm太いが比率は4分1厘になることから、ほぼ『匠明』の記述に合致した柱の太さといえる。

3 舞台の貫の内法と組物

舞台の床から貫の下端までの内法寸法は、『匠明』によれば、柱間の4割とし、また組物は三斗組にすべきであるが、三斗組を用いない時は、組物の分だけ内法を高くする心掛けについて記す。

一、貫内法、四寸内法ニすへし。其上三斗して桁ヲ可用。但三斗不致時八其心持して、内法高くすへし

旧岡崎邸能舞台の貫は柱頂部に渡され(頭貫)、床から貫の下端までの寸法2 940mmは柱間寸法(5 460mm)の5割3分になる。これは『匠明』で示される割合よりも1割3分上回る。ただし、実測値は、岡崎謙が参考にした靖国神社能舞台(旧芝能楽堂)の柱間寸法(18尺9寸)と貫の内法寸法(10尺9寸)との比

率(5割3分)に合致する⁽⁶⁾ことから、両舞台の関連を知る上で重要である。

また、組物に三斗組を用いて虹梁と桁を支持する点は、『匠明』が記す正式な「三斗して桁ヲ可用」に合致している。

4 橋掛の規模

橋掛の規模について『匠明』は次のように記す。

一、橋掛幅八七尺。高サモ桁ノ下迄七尺ニすへし。

長サ八五間ヲ三間(マ)ニ割可用。又七間ヲ三間ニモすへし。

橋掛は幅が2 425mm(8尺)、床から桁の下端までが2 355mm(7.7尺)であり、『匠明』の記述よりもやや長く、また桁行全体の長さは7 400mm(4間)で同記述よりも短い。しかし、その間に2本の柱を立てて柱間3間にしている点は『匠明』の記述に合致している。

橋掛の長さは、岡崎邸の敷地広さによって制約を受けていたものと推察される。

実測調査による模型制作とその意義

2年間にわたる旧岡崎邸能舞台(小樽市能舞台)の実測調査のデータにもとづいて2000年6月から模型制作に取り掛かり2001年2月末までに完成させた(図14~16)。縮尺は30分の1、材料は市販の模型用檜を使用し、加工には手鋸、カッター、ミニルータ、鉋などを用い、鏡板の松竹の絵は色鉛筆で仕上げた。

模型制作を担当した学生の感想は、「軒まわりの収まりや墨付の技法を理解していないと正確な模型は作れないと感じた」と卒業研究論文⁽⁷⁾で述べている。これは単に寸法に合わせて模型を作ったのではなく、実測調査によって直接能舞台に触れ、さらにその細部に



図14 旧岡崎邸能舞台模型(正面から撮影)

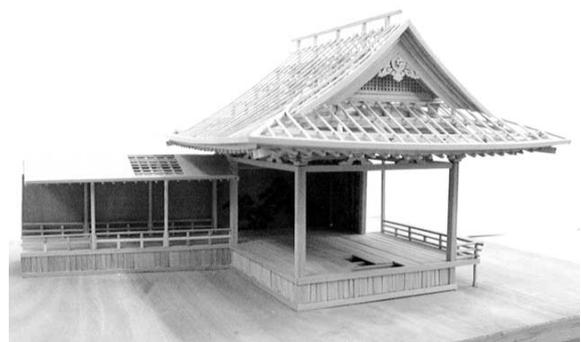


図15 旧岡崎邸能舞台模型(正面横から撮影)

及び収まりを理解しながら模型制作にあたったを示し、実測調査と模型制作をとおして和風建築の構造についての理解が一層深められたことが窺われる。

また、実測調査は1999年度と2000年度ともゼミナールの学生全員参加によってなされ、模型制作も担当の学生を中心に共同作業でおこなったことから協力体制による作業の取組みと達成の重要性を会得できたといえよう。

まとめ

旧岡崎邸能舞台（小樽市能舞台）の近代和風建築としての意義をまとめると次のとおりである。

旧岡崎邸能舞台は大正期に邸宅の中庭に見所を配して建てられた極めて稀な能舞台である。邸宅に能舞台が設けられた事例には、旧高取家住宅（明治37年、唐津市、国指定重要文化財）があるが、これは座敷に組み込まれた板敷きの舞台であり、このことを考え合わせれば旧岡崎邸能舞台は全国的に見てもその希少性が認められる。

本能舞台は昭和36年に小樽市能舞台として解体移築されているが、本研究によって各部の構造を実測調査した結果、旧態を保っていることが確認された。また、『匠明』中の「舞台」の記述と比較したところ、舞台の規模、柱の太さ、組物、橋掛の柱間などに合致点が見出され、伝統的な能舞台の建築形式にもとづいて建てられたことが認められた。

一方、本研究は北海道職業能力開発大学校建築科の総合制作実習の一環として2箇年にわたって実施し、実測図面にもとづいた模型制作および卒業研究論文を小樽市民へ報告できたことは地域社会への成果の還元となった。

なお、積雪地の小樽に建築された旧岡崎邸能舞台

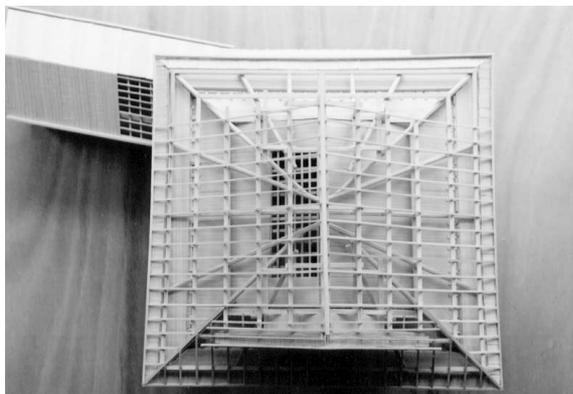


図16 旧岡崎邸能舞台模型（上方から撮影）

は、柱間装置が伝統にもとづく3間四方の形式であることが確認されたことから、積雪荷重に対処した特徴が小屋組に見い出せると推察される。そこで、今後、他地域の能舞台の小屋組との比較研究を実施し、その構造上の特徴を解明するのが課題である。

謝辞

桜井光雄氏（小樽公会堂）には、本建物の現地調査に際してご支援を賜わり、ここに感謝の意を表します。

[注]

〔注1〕ポリテクビジョン2001（第5回研究開発発表会、2001年2月27日～3月1日）において、北海道職業能力開発大学校建築科学生藤井徹真が「旧岡崎邸能舞台（大正15年、小樽市）について」を展示発表。

〔注2〕小樽の「能に親しむ会」の主催により2001年3月18日に「小樽の能舞台に関する調査報告会」が小樽市公会堂で開催され、北海道職業能力開発大学校建築科学生藤井徹真と同建築施工システム技術科学生部田亜希が研究成果を発表。翌3月19日には朝日新聞と北海道新聞に報告会が報道された。

〔注3〕小樽市は旧岡崎邸能舞台を1985年7月23日に第12号小樽市指定歴史的建造物に指定。

〔注4〕小杉米蔵の孫小杉信彌（小樽市真栄1丁目）からの聞き取り調査（2001年3月21日）によって教示を受ける。

〔注5〕上掲〔注4〕に同じ。

[参考文献]

- (1) 駒木定正、小樽区公会堂（明治44年）について、日本建築学会大会学術講演梗概集（東北）1991年9月、pp.909～910
- (2) 太田博太郎監修、匠明、鹿島出版会、1971年12月、pp.298～299
- (3) 「建築費」（1.能舞台、見所、脇見所、住宅。2.居宅部分。3.倉庫）岡崎家所蔵
- (4) 「受託か断るか責任役員会前決定方針の件」昭和48年2月決裁、北海道神宮所蔵
- (5) 上掲②に同じ
- (6) 在来能舞台実測詳細図 二十分ノ一、靖国神社所蔵
- (7) 藤井徹真、旧岡崎邸能舞台の小屋組について、北海道職業能力開発大学校卒業論文、2001年3月、p.13